

チャップリンとオーウェル～20世紀の巨悪と闘った2人の点と線

西川 伸一

大木毅『独ソ戦 絶滅戦争の惨禍』（岩波新書、2019年）が売れに売れている。帯には「戦場ではない 地獄だ」とある。この「地獄」を現出させたのが、ヒトラーとスターリンにほかならない。彼らは20世紀の巨悪であろう。チャップリンとオーウェルは、それぞれの比喩的表現方法でかかる巨悪と闘った。

チャップリンは映画でヒトラーを敢然と笑い倒した。周知のとおり、それが『チャップリンの独裁者』*The Great Dictator* (1940)である。チャップリンはこの映画について、「ヒトラーという男は、笑いものにしてやらなければならないのだ。(略) なんとしてもわたしは、血の純潔民族などという彼らの神秘的世迷言を笑いものにしてやりたかった」と回想している(チャップリン 1966: 459)。とはいえ、アメリカはまだ第2次世界大戦に参戦していない。ハリウッド全体がナチスをあからさまに非難する映画をつくることに躊躇していた時期であった。チャップリンは相当の覚悟と不安をもって製作に取りかかることになる。

幸いにも『独裁者』は大当たりした。ラストの演説シーンは映画史上「世紀の6分間」と激賞される。1941年2月末までに世界で3000万人が鑑賞したという。日本でのチャップリン研究の第一人者である大野裕之は、映画好きのヒトラーも「『独裁者』を見た」と述べている(大野 2015: 228)。ただし、この映画はアメリカの保守層に浸透しつつあった(チャップリンは共産主義者だ)との当て推量を強めることにもなった。「世紀の6分間」についても、当時の批評家の多くが手厳しかった。ある新聞は「わたし〔チャップリン〕が共産主義の指を観客に向けている」と評した(チャップリン 1966: 473)。戦後、この疑念を決定的にした

のが『チャップリンの殺人狂時代』*Monisieur Verdoux* (1947)である。

これを上映する映画館には、在郷軍人会のメンバーが「忘恩の共産党シンパ、チャップリン」「チャップリンをロシアへやれ」などと書かれたプラカードを掲げて押しかけたこともあった(チャップリン 1966: 532)。記者会見では共産党のシンパかと問われる不快な経験もしている。

チャップリンは1889年4月16日にイギリスで生まれた。4日後の4月20日にヒトラーがオーストリアで誕生する。同じちよび髭をたくわえ、互いを意識し合った。そして、オーウェルがインドで生を受けるのは1903年6月25日のことだ。

オーウェルは小説でスターリンを醜悪な豚になぞらえた。それが言うまでもなく『動物農場』(1945)である。その執筆動機は1947年3月に書かれた『動物農場』のウクライナ語版のための序文に詳しい。オーウェルは1936年にスペイン内戦に参戦して共産党によるトロツキスト弾圧を目の当たりにした。スターリニズムの非道ぶりを思い知るのである。ところが、西欧の人々がその本質に気付かず、スターリン体制に幻想を抱いていることを強く危惧した。

「一九三〇年以後、ソ連が真に社会主義と呼ぶうるものにむかっているという証拠は、わたしにはほとんど見出せなかった。それどころか、それが階層社会に変貌しつつある徴候が明らかに見えて、衝撃を受けたのである。(略) 社会主義運動の再生をわたしたちが望むのであれば、ソヴィエト神話を破壊するのが肝心であるという確信を、この十年のあいだにわたしは強めてきたのである」(オーウェル 2009: 214-216)。

スペインから命からがら脱出してきたオーウェルは、だれもがたやすくこの神話の正体を見破られるよう動物界に仮託した寓話を着想するのである。こうして執筆された『動物農場』の初版は4500部であり、瞬く間に売り切れた。アメリカ版2刷に至っては50万部を

上回る売れ行きだった。加えて、オーウェル存命中にすでに18か国語に訳されている(オーウェル 2009: 232)。ちなみに、スターリンはたいへんな読書家で、その蔵書は数万冊に達していたという。『動物農場』も密かにそこに収められたのではないかと夢想してしまう。ともあれ、この傑作でオーウェルの知名度は一挙に高まった。

さて、『チャップリン自伝』にもチャップリンの伝記として最も徹底的な『チャップリン』にも、詳細な人名索引が付けられている。しかし、両著ともそこにオーウェルの項目はない。チャップリンには同じイギリス人のオーウェルの名を耳にする機会はなかったのだろうか。

片やオーウェルはもちろんチャップリンを知っていた。というより、警戒していた。1998年7月6日付『読売新聞』夕刊によれば、オーウェルはイギリス外務省の反共宣伝機関に「隠れ共産主義者」の名簿を提供していたという。英紙『デイリー・テレグラフ』の報道をAP通信が配信し、それを紹介した記事である。名簿にはチャップリンを含む130人が列挙されていた。オーウェルはこれを1950年1月に死去する直前にしたためた。

また、2003年6月22日付『朝日新聞』は、英紙『ガーディアン』の報道として、オーウェルが英政府に「隠れ共産主義者リスト」を渡していたと伝えた。こちらは1949年に手交された38人のリストで、やはりチャップリンの名もあった。彼らについてオーウェルは「私の意見では、隠れ共産主義者、共産主義のシンパ、あるいはその傾向があり、信用ができない」と書き添えている。

オーウェルはスターリン体制が許容する余地のない全体主義であると確信していた。ゆえにそれに無自覚で、あるいは目をふさいで容共的・親ソ的な発言や行動をする著名人に、最晩年に至り我慢がならなかったのだろう。一方で、チャップリンは「隠れ共産主義者」疑惑に苦しめられ続けた。ついに、1952年9月にイギリスへ向かう船上で事実上の国外追

放の知らせを受け取るのである。

参考文献：

オーウェル, G. / 川端康雄訳 (2009) 『動物農場』
岩波文庫。

大野裕之 (2015) 『チャップリンとヒトラー』
岩波書店。

チャップリン, Ch. / 中野好夫訳 (1966) 『チャッ
プリン自伝』新潮社。

横手慎二 (2014) 『スターリン』中公新書。

ロビンソン, D. / 宮本高晴・高田恵子訳 (1993)
『チャップリン』(上・下) 文藝春秋。